老健ほっかいどう

VOL.8
2020年6月

一般社団法人北海道老人保健施設協議会

特　集

新型コロナウイルス感染拡大 老健への影響と対策

北海道苫小牧市
樽前山

施設紹介 「みどりの苑」「ケアライフ王子」

広がるつながる輪 西胆振介護老人保健施設ネットワーク

巻頭言

要介護者と新型コロナ

一般社団法人　北海道老人保健施設協議会　幹事
医療法人亀田病院　介護老人保健施設グランドサン亀田　理事長　蒲池 匡文

老健にとって大変なことが起きています。言うまでもなく、新型コロナウイルス感染症の蔓延です。2020年のゴールデンウィークの時点で、全国非常事態宣言が続いています。

この感染症が難儀な点は数多いです。接触感染と飛沫感染の両方で拡散すること、潜伏期間でも感染力が強いこと、無症状の感染者も少なくないこと。利用者の集団生活の場で支援する我々にとって大きな問題です。また、有症状者の2割が要医療レベルに悪化しますが、悪化しやすいのは高齢者と成人病の有病者であること。老健の利用者は皆さんが当てはまります。

新型コロナウイルス感染症は感染症法で規定されたため、市中でPCR陽性者が出ると保健所から感染症指定病院への入院が勧告され、速やかに運用されてきました。しかし、例外があります。認知症施設、高齢者施設、身心障害者施設です。クラスターとして感染者が一気に多人数で発生したことが理由だろうと思います。そうするとその施設の中での籠城作戦になります。

ワンフロアで隔離しても、その中で利用者が生身で行き来しつつ交流して生活している限り、感染拡大を防ぐのは難しいでしょう。認知症の利用者ご自身の理解にゆだねることでは行動制限は成就されにくいからです。職員が感染すれば潜伏期間中に感染の媒介者になる可能性があります。第1号感染者が出たときにはすでに種が撒かれていることでしょう。

感染症アウトブレイクに際しては、地域の老健施設間の人的移動で援助を行うことには困難があります。職員が利用者を思う貴重な施設を壊してはならず、現在本当に大変な介護崩壊に直面している現場への強力な公的支援を切に望みます。

要介護者の集団感染発生の際は、悪化しやすい層として可能な限り速やかに医療の場へ該当者を移すべきです。まだ蔓延していない地域においても、まとまった数の要介護の感染者をいかに医療の場に持って行くか、行政の仲介で介護・医療の枠を超えた話し合いが求められます。

実際どの老健施設でも、クラスター発生はありうる。そのときにどうするか考えておく。ひるがえって現実の防止策をさらに練る。今、その繰り返しを必死に行っている施設がほとんどでしょう。全国老健協のホームページには多くの有用なアナウンスが挙がっています。非加盟の老健施設にも届いているでしょうか。

不安ですが、収束が見えてくることを信じて励ましあいましょう。今できることに気をつけて利用者のための仕事をしてまいりましょう。

Information

新型コロナウイルス感染症拡大の状況を鑑み、今年度の認知症介護実践研修は、下記の通り中止および保留とすることになりました。何卒ご理解とご協力をたまわりますよう、よろしくお願い申し上げます。なお、その他の研修については、代替案を含め検討中です。決定次第、当協議会ホームページ等でご案内します。

▶2020年度の研修会開催状況

研　修　名	日　程	開催状況
認知症介護基礎研修	6月24日	中　止
認知症介護実践研修（実践者研修課程）	7月13日～8月27日	中　止
認知症介護実践研修（実践リーダー研修課程）※	10月1日～11月25日	保　留

※認知症介護実践研修（実践リーダー研修課程）の開催有無については、決定次第、ホームページ等でご案内します。

30年超続く小学生の宿泊体験が名物

社会福祉法人緑陽会 介護老人保健施設 みどりの苑

みどりの苑で大切にしているのは、人を育てる取り組みです。苫小牧市社会福祉協議会との共催で30年以上続けている「ボランティアスクール」の受け入れは、その表れの1つです。「市内の小学5・6年生を対象に、1泊2日で入所者さんの食事や車イスの介助、レクリエーションなどを通じて、介護を楽しみながら学べるプログラムにしています」と副施設長の畑中絹江さん。受け入れ前には、主担当となる主任支援相談員の田中崇雄さんが子どもたちに丁寧なオリエンテーションを実施。「お年寄りとの接し方や生活の場に入れさせてもらううえでの注意点をお話しすることで、当日は入所者さんとのコミュニケーションもスムーズです」。子どもたちとのひとときを楽しみにしている入所者も多く、すっかり夏の風物詩になっているとか。看護主任の石川真弓さんは、「職員にとってもプログラムを考える楽しみもありますし、人に教える能力が養われる良い機会になっています」と話します。3年前には、かつての参加者の1人を職員に迎え入れたうれしいケースもありました。こうした風土は、高校生のインターンシップや修学旅行生の積極的な受け入れにも発展。「看護や介護の仕事を志す子どもたちが、もっと増えるきっかけになれば」と川村勝施設長は期待を寄せます。

これとあわせて、同施設では職員の教育体制づくりにも注力。3カ月の研修と試験の合格が必須となる介護技術インストラクターの資格制度を設け、部下に対する教育スキルの標準化と教える自信を育成。さらに入職から半年間は、教える側と教わる側を俯瞰しながら全面的にバックアップするキャリアサポート係も配置し、「一人ひとりに即した教育環境をつくっています」と畑中さん。

左から田中さん、石川さん、川村施設長、畑中さん

車椅子の介助を体験する小学生

他方で、認知症や看取りといったケアへの充実も図りながら、地域にひらかれた施設をめざす構えです。

- 住所／苫小牧市松風町2-15
- TEL／0144－84－7068
- 入所定員／80名（内、40名は認知症専門棟）
- 通所定員／10名

併設病院との連携でニーズに沿った支援を

医療法人王子総合病院 介護老人保健施設 ケアライフ王子

併設する母体の王子総合病院との連携がケアライフ王子の強みです。1つは、夜間・休日の際の救急センターとの連携体制の構築です。看護・介護部長の緑川直子さんは、「老健の看護師は“判断能力”が重視されるため精神的負担が大きい」と指摘したうえで、「特に、医療的なケアや判断を1人で担わなければならない休日や夜間帯に、併設病院に協力を仰ぐ体制があることでプレッシャーが軽減されています。入所者さんにとっての安心にもつながっていると思います」と話します。

1列目左から和田さん、三浦さん、畑中さん、2列目左から尾関さん、鈴木さん、緑川さん、岩田さん

2つめは、病院との密な情報交換をケアの質向上につなげることです。特に同院からの入所者であれば、医療上の注意点等を小まめに確認し合い、より適切なケアを行うようにしています。さらに緑川さんは、月に1度開催される病院看護部会議にも参加。「臨床知識やトラブル等の対応に関わる事例を学び、持ち帰って職員に情報を共有しています」。他職種においても同様に、「利用者本人と家族の真のニーズを叶えるため、病院相談室と入所前の綿密な情報交換を心掛けています」とは、事務部長で支援相談科長の三浦浩明さん。そのほか、病院薬剤師に薬の効能や服用方法についてアドバイスをもらうことも多く、適切な薬剤管理を可能にしています。

そして、北海道老人保健施設大会における演題発表の常連である同施設。論文作成の際に、テーマによっては同院の多職種に相談することもあるとか。「食事介助をテーマにしたときには、当施設には配置されていない言語聴覚士に介助方法や姿勢について相談し、発表内容に磨きをかけました」と三浦さん。こうした演題発表の経験は、職員のモチベーションやスキルの向上にもつながっています。「出来ることに精一杯取り組み、もっと力をつけていきたいですね」（緑川さん、三浦さん）。

王子総合病院とは渡り廊下でつながっている

- 住所／苫小牧市若草町3丁目4-8
- TEL／0144－36－7111
- 入所定員／100名（内、40名は認知症専門棟）
- 通所定員／40名

特 集

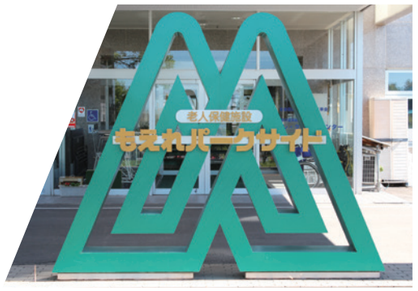
新型コロナウイルス感染拡大
老健への影響と対策

新型コロナウイルスが猛威をふるい、老健への影響は深刻さを増しています。道内の老健においては国や全国老人保健施設協会等のガイドラインにもとづきながら、あらゆる対策を講じて毎日を乗り切っているのではないでしょうか。本特集で紹介する事例から、あらためて何ができるかを考える機会となれば幸いです。

現場リポート

新型コロナウイルス感染者発生から学ぶ
使命感を持って情報発信を継続

社会医療法人社団三草会
介護老人保健施設もえれパークサイド　〈副施設長〉井上 克己 さん



感染者判明でフロア職員全員が自宅待機へ

当施設で感染者が発生した際、当面の課題として挙がったのは保健センターからの指示にもとづく濃厚接触者の特定と、その他の者への接触をいかに減らし、感染拡大を防ぐことができるかということでした。しかし、濃厚接触の定義は保健センターからも示されず、どこまでをその範囲とするか判断に迷いました。結果として感染が発生したフロアのほぼ全員を接触者と定義し、自宅待機としたため、翌日からの人員のやりくりは非常に困難となりました。また、感染を広げる可能性から考えると、他部署からの応援も簡単には行えず、必要な業務と応援体制のすり合わせは大変な作業でした。

一方、感染拡大の防止策としては、濃厚接触者とされた入所者様の生活とその他の入所者様の生活（生活支援も含む）を分けることには細心の注意を払いました。そのためにフロアの一部分にかなり頑丈な壁を作り、簡単に出入りできないよう空間をしっかり分けました。

そして、これ以降の新型コロナへの対応については、私が担当となり逐一ブログで情報発信していくことを決めました。一番の目的は、当事者が語ることが何よりも正確な情報だと思ったからです。また、新型コロナに関する対応は不透明なことが多かったので、この情報を発信することの社会的な意義はあるように感じていました。ただ同時に、必要以上に情報が拡散することの恐怖感もありましたし、後になって風評被害のような声に苦しめられたことも事実です。

職員の不安を解消するべく情報を開示

濃厚接触者のPCR検査結果を待っている時間や経過観察に要した2週間は、専属で関わった職員には相当なリスクとストレスがあったように思います。現在、振り返り作業を行っている最中で全職員の様子はまだつかめていませんが、すべてにおいて不透明なことが多く不安を抱えていたと思います。そのため、できるだけ情報をオープンにして抱えている不安を解消しようと、施設内に掲示板を設けました。職員からの要望や疑問に対する回答、会議での決定事項、そして全体の流れを掲載し、情報共有を図りました。

最終接触から2週間という経過観察期間の終わりが見え始めたころ、施設内ではサービスを再開して健康増進と在宅復帰・在宅生活の継続を支援したいという声が多く挙がった一方、感染拡大リスクを考えてサービスを抑制するべきという声も挙がり、何度も話し合いを重ねました。その結果、当施設の理念である「リハビリテーション施設として、利用者様・ご家族様・地域のニーズにお応えします」に立ち返り、安全に配慮しながら段階的なサービスを再開するという決断にいたりました。利用者の皆様がサービス再開を快く受け入れて下さったのは、真実を伝え続けてきた結果だと思っています。

マネジメント面で残された大きな課題

個人的にはとにかく必死で目の前の課題を乗り越えていったというのが正直な気持ちです。マネジメントする立場としては、スタッフ一人ひとりの「使命感」や「責任感」に頼るばかりでした。これによって生じた関わりの濃淡や温度差などは、大袈裟に言うと組織を分断させてしまう怖れもありました。安全が確保されていない状況下でどのように協力を要請したら良かったのか――。震災後の停電や今回の新型コロナのような大規模災害が発生した際、私たちは支援者と同時に被災者になってしまいます。いち個人として、そして施設スタッフとして、さらに組織や社会的存在としてどう立ち回って行けば良いか――。ここでのマネジメントには大きな課題が残されており、まだ何も解決できていません。

さらなる課題としては、国（市）によって基準が示されているものや解釈が曖昧なもの、施設によって定めた基準等に対して、判断基準を施設内ですり合わせるとともに、最新情報に更新していかなければならない点は非常に困難を極めました。

今回の経験からさまざまな課題が明らかになりましたし、学びがあったとも思っています。まだ言語化・普遍化するに至ってはいませんが、一つひとつ検証していきたいと考えています。

もえれパークサイドにおける新型コロナウイルス感染症発生の主な経緯

4月30日（木）		入所者1名が38.5度の発熱。血液検査により肝機能上昇、炎症反応を認める。医療機関を受診し、インフルエンザ・PCR・MRI検査実施。「胆のう炎疑い」でそのまま入院。
5月1日（金）		保健所より「陽性」の連絡。
5月2日（土）		●同施設ホームページで「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）発生のお知らせ」と題したブログを更新。この日以降、ブログでほぼ毎日「本日の状況」を更新。 ●入所者・通所者および全職員の体調を確認し、問題ないと判断。 ●感染者が発生したフロアのほぼ全ての職員を接触者と定義し、自宅待機とする。他部署からの応援体制を構築。
5月3日（日）		前日同様、入所者・通所者および職員の体調を確認し、問題ないと判断。
5月4日（月）	午前	感染者と接触があった入所者5名と職員28名を濃厚接触者とし、PCR検査を依頼。
	午後	全員「陰性」と判定。
5月8日（金）	夜間	感染者の接触者であった入所者が発熱し、救急搬送⇒入院に。5月10日（日）に「陰性」と判定、事なきを得る。
5月14日（木）		接触のあった全員の体調に問題がないことを確認し、14日間の経過観察期間を終える。
5月15日（金）		デイケアおよびショートステイ、新規入所受け入れを段階的に開始。

新型コロナ対策事例

3老健の対策事例紹介
試行錯誤で取り組むそれぞれの対策と情報のあり方

医療法人盟佑会
介護老人保健施設
アートライフ恵庭
（恵庭市）
◀左から白石さん、中村さん、齋藤さん

医療法人社団刀圭会
介護老人保健施設
アメニティ帯広
（帯広市）
◀左から北畑さん、中尾さん

社会福祉法人
旭川福祉事業会
老人保健施設
サニーヒル
（旭川市）
◀左から赤坂さん、佐々木さん

感染予防対策

徹底した消毒と防護具を活用

感染予防対策の第一段階としては、マスク着用を含む咳エチケットや手洗い、アルコール消毒等により感染経路を断つことが重要とされています。それぞれの施設では、小まめな消毒作業に加え、限りある物資を無駄なく効果的に使う工夫や職員が代用品を手作りしながら予防対策を行っています。

▲手作りのフェイスシールドを着用して食事介助をする職員（アメニティ帯広）

▲事務カウンターに吊り下げたビニールシート（アートライフ恵庭）

アートライフ恵庭では、通所リハビリテーションの利用者にはマスクを義務付けていますが、マスクを持っていない場合は職員が手作りした布マスクを提供しています。「予防は布マスク、ケアの際には使い捨ての紙マスクを使うなど、状況や行為に応じて使い分け、無駄を出さないよう注意しています」と事務部長の齊藤英樹さんは説明します。あわせて、クリアファイルを使ってフェイスシールドも職員で手作りしました。

同じく手作りのフェイスシールドを活用しているアメニティ帯広では、消毒作業は事務職員も含めた全職種総動員で時間を定めて実施。「アルコール消毒液を設置すると、認知症の利用者が口に入れてしまう恐れもあるので、携帯ボトルに入れて職員が個々に持ち歩き、その都度消毒するようにしています」と看護部長の北畑良子さん。

サニーヒルでも、職員がボトルに入れたアルコール消毒液を持ち歩き、介護助手も交えていつでも誰でも消毒できる体制を整えています。マスクについては、通所利用者への提供に加え、職員と同居する家族に対しても支給をしています。「同居するご家族も予防しなくては意味がありません。もしご家族がマスクを持っていなければ支給して、予防に万全を期すよう努めています」と看護課長の赤坂寿幸さんは説明します。

3密を避けるルールと体制づくり

感染予防としては、感染リスクの高い環境を回避すること、すなわち「換気の悪い密閉空間」「多数が集まる密集場所」「間近で会話や発声をする密接場面」といった「３密」をいかに避けるかが問われています。アメニティ帯広では、食事時間を複数のグループごとに分けて時間差で提供しています。「入所者さん同士の距離を確保したいのですが、当施設の食堂はスペース上のゆとりがありません。通常は６人掛けのテーブルを、３人程度に減らして距離を保って食事していただくようにしています」と事務部副部長の中尾雅幸さん。ただしこれにより、食事提供の時間が長くなって他の業務への支障が生じるという悪循環には頭を悩ませているといいます。

リハビリについては、厚生労働省の通知に「社会福祉施設等においては、利用者の廃用症候群防止やＡＤＬ維持等の観点から、一定のリハビリテーション又は機能訓練や活動を行うことは重要である一方、感染拡大防止の観点から、『３つの密』を避ける必要がある」（「社会福祉施設等における感染拡大防止のための留意点について（その２）」）と示されているように、３施設ともに３密をできる限り避けながら継続して実施しています。アートライフ恵庭では、すべてのリハビリを居室での個別対応へ切り替えたほか、通所と訪問を併用する利用者が感染の不安を訴える場合は訪問リハビリのみを提供する、といった対応もしています。

▲通所利用者にもマスクを着用してもらう（サニーヒル）

一方、いずれの施設も２月末頃から面会制限を続けており、もはや感染源となり得るのは職員であるという認識のもと、それぞれ独自のルールを運用しています。サニーヒルとアメニティ帯広では、原則、在住する上川圏、十勝圏以外の移動は自粛を要請。休日の行動についても、研修やイベントの参加は禁止としました。「基本的な感染予防対策は徹底しつつも、休日の行動などは職員の自主性にまかせている」というのはアートライフ恵庭です。「その代わり、わずかな体調変化や心配事があれば秘密にせず、すぐに報告するという４つ目の“密”も意識し、当施設の職員らしい行動を呼びかけています」と看護部長の中村君代さんは話します。

◀職員一丸となって消毒対策を実施（サニーヒル）

利用者・家族への対応

面会制限下でもつながりを絶やさない工夫

３施設いずれも継続中の面会制限ですが、懸念されるのは家族と会えない寂しさから利用者のＱＯＬが低下してしまう恐れがあること。それを避けるため、ロビーにパソコンを設置してオンライン通話ツール「Ｓｋｙｐｅ（スカイプ）」を利用した面会サービスを開始したのはアメニティ帯広です。サニーヒルでは、利用者に無料で電話を貸し出し、束の間の家族との会話を楽しんでもらうサービスを行っており、どちらも好評を呼んでいます。アートライフ恵庭では、施設の外やロビーに訪れた家族と、利用者が離れた場所からでも多少なりとも顔を合わせられるよう職員が介助するといった場面も多く生まれ、温もりあふれる時間になっているといいます。窓口業務を担う白石知巳さんは、「ご家族が洗濯物を取りに来られた際などに入所者さんの様子を小まめにお伝えし、とにかく安心してもらえるようなコミュニケーションを心がけています」と話します。

このほか、利用者の日常の様子を写真に収めて家族に渡したり、家族向けのお便りやブログに掲載するなど、直接会うことはできなくても利用者と家族のつながりが途切れることがないような工夫が、それぞれの施設において試行錯誤で行われています。

▶ロビーに設置したスカイプを通じ家族と面会する入所者（アメニティ帯広）

▲施設の外で入所者に向かって手を振る家族（アートライフ恵庭）

▲家族に渡すお便りには入所者の様子をたくさん掲載（アートライフ恵庭）

情報共有と発信

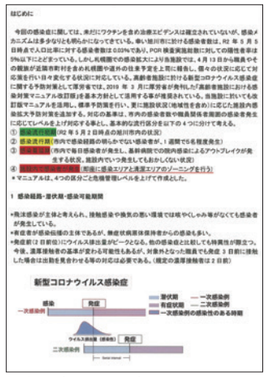
情報発信が不安解消と意識向上につながる

感染予防にとどまらず、厚労省や自治体等の情報を収集することは大前提であるとともに、施設内の状況や方針をいかに共有し、発信することも施設にとって必要な取り組みです。

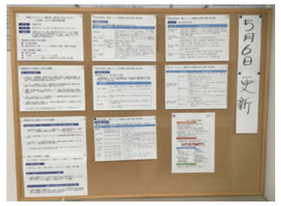
アメニティ帯広では、法人本部に臨時の感染対策委員会を設置。中尾さんと北畑さんもメンバーに、各事業所の対策や備品の在庫等について情報を共有し、必要な対策を迅速に打てるようにしています。特に中尾さんはリスクマネジャーでもあることから、こうした対策の評価・分析を通じて、法人のリスクマネジメントを確立する役割も担っているといいます。

新型コロナウイルスにまつわる情報を収集し、ロビーの掲示板に貼って職員間で共有を図っているのはアートライフ恵庭です。恵庭市内で連携する事業所やネットワークに対しても、取り組んでいる対策や物資の入手状況等の情報を意識的に発信しています。

サニーヒルでは、２月25日時点でホームページ上において同法人としての対応をまとめた文書を公開したとともに、対応マニュアルも整備し、職員や地域に啓発しています。「新型コロナウイルスについてもっと地域に知ってほしいという、言わば老健としての地域貢献活動としても捉えています。マニュアルを用意したことで職員の不安を解消し、意識を高めるきっかけにもなりました」と副施設長の佐々木さん。



▲独自で作成した新型コロナウイルス対応ガイド（サニーヒル）



▲掲示板に厚労省や北海道からの通達を掲載（アートライフ恵庭）

“もしも”をふまえた今後の対策

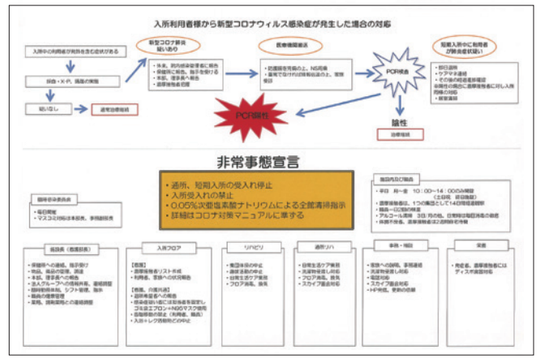
職員の危機管理意識の向上が肝

記事執筆時点（５月14日）では、３施設において感染者は出ていませんが、それぞれが万が一に備えた準備と対策を講じています。アートライフ恵庭では、感染を疑う入所者が発生した場合を想定した隔離体制の仕組みを構築しました。入院するまでの期間を最大14日間とし、休止中のデイケアホールやフロア等を活用しながら、感染の段階に即した療養エリアを設定。対応にあたるメンバーを選出したほか、医療機器や消耗品の確保、食事提供についてのルールも策定しました。「災害と同レベルの対策を講じ、ウイルスを持ち込まないよう予防を徹底していきたい」と齊藤さん。中村さんは、「自分の身も他人の身も守るという職員の意識向上を図っていきたいですね」と気を引き締めます。

サニーヒルでは対策マニュアル上で隔離体制について、感染流行初期、感染流行期、感染蔓延期、感染者発生期の４区分ごとに対応をまとめています。「全職員がこの役割を全うしなければ感染は広がってしまうという危機意識を高めるとともに、職員それぞれでも新型コロナウイルスへの関心を高めていく必要があると感じています」と佐々木さんは強調します。

一方、アメニティ帯広では、入所者のなかで感染疑いのある肺炎患者が発生したことで、一気に対策が進んだ経緯があったといいます（後日、当該患者は陰性であると判明）。入所者、利用者、職員から感染者が発生した際を想定した対応手順が一目でわかるフローチャート図を作成し、いざというときに備えています。北畑さんは、「これをもとに人員体制など臨機応変に対応していきたい。一時的に危機意識が高まっても日にちが経てば薄らいでいってしまう恐れがあるため、どう高め続けていくかが課題です」と指摘します。

そして、こうした対策を徹底する他方で、疲弊していく職員へのケアについてはいずれの施設も苦慮しているのが実情です。「厳戒態勢が続くなか、職員のストレスが少しでも緩和するような待遇等も考えていかなければなりません」と中尾さんは話します。



▲感染者発生時のマスコミ対応も記載されたフローチャート（アメニティ帯広）

参考サイト

感染予防に必要な物資の情報収集ができるサイトもあります

● 投稿サイト

コロナ支援・医療介護福祉物品情報　検索　https://www.facebook.com/groups/ouentunagu/

Act Against COVID-19 ～医療用個人防護具の代替品 性能評価と作り方　検索　https://covid-19-act.jp/ppe/

広がるつながる輪

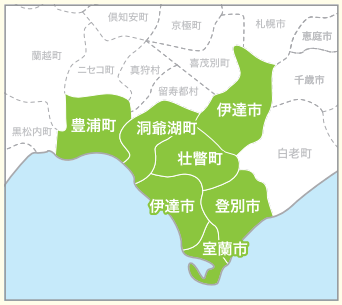
西胆振介護老人保健施設ネットワーク

今年で設立10年目！地域独自で展開するネットワークをご紹介します。

お話をうかがった人　会長 千葉 泰二さん（グリーンコート三愛　理事長）　幹事 菊地 芳一さん（グリーンコート三愛　事務長）

西胆振介護老人保健施設ネットワークとは？

室蘭市、登別市、伊達市、豊浦町、壮瞥町、洞爺湖町の3市3町を網羅する西胆振地域。この地域に点在する8つの老健施設が集まり、2010年10月に設立されたのが西胆振介護老人保健施設ネットワークです。地域における組織的な情報共有や協力体制を構築することを目的としています。



所属施設

【室蘭市】エバーグリーンハイツ室蘭、憩、母恋、
【登別市】グリーンコート三愛
【伊達市】北湯沢温泉いやしの郷、プライムヘルシータウン湘南
【豊浦町】豊浦町
【壮瞥町】プライムそうべつ

どんな活動をしているのですか？

年に1度、総会と職員研修会、多職種による情報交換会を開催するとともに、災害協定にもとづく大規模災害避難訓練を行っています。職員研修会では、外国人人材受け入れの実情や超強化型老健の体制づくりについてなど、毎年さまざまなテーマを設定。情報交換会では、職種と勤務年数のグループごとに、各施設が抱える課題を話し合ったり、コミュニケーションを深める場になっており、とても盛り上がります。一方、大規模災害避難訓練は、主に電話を通じて非常時を想定したやり取りを行っています。

今後の活動を教えてください。

以下の3つを重点的に取り組んでいきたいと考えています。

19年度研修会は介護人材を受け入れているアメニティ帯広の事例を学んだ

2018年度研修会では「いこいの森」（三重県）から講師を招いた

1. 胆振東部地震や西胆振大規模停電といった、昨今多発している大規模自然災害に対応しうる相互関係の強化と体制を構築する。
2. 人口減少が著しい西胆振地域において、ネットワーク全体で介護人材を育成し、定着率増加等につながる働きやすい環境づくりを推進する。
3. ネットワークを活用することで、各老健がそれぞれの地域の特性に適した役割を果たしていけるよう相乗効果を図っていく。

最後に、地域におけるネットワークづくりのポイントを教えてください。

事務職ならば入退所や稼働率の相談や情報交換は有益ですし、現場の専門職であればケアにおける悩みを相談できるネットワークがあるというのは心強いですよね。どの老健さんも情報は欲しいはずです。まずは少人数からはじめてみてはいかがでしょうか。

事務局通信

皆様からのご意見・ご要望お待ちしています！

「メラビアンの法則」では9割の非コミュニケーション（視覚・聴覚）が1割のコミュニケーション（言語）より人間関係で重要であると説く。新型コロナウイルスは「三密」回避が最大原則。つまり9割の非コミュニケーションは相当なフィルターを介在し他者と人間関係を進める。私たちはこの新たな難題をベースに生活し、利用者との新たな信頼関係構築を目指す。私達一人ひとりの創意工夫と現場実践が試される！

（医療法人北翔会／志田原実男・事務連副会長）

道老健協・研修部会では、毎年複数の研修会を企画・実施しております。今年度は、新型コロナウイルスの影響にて、すべての研修会の開催が中止になる可能性があります。道老健協・研修部会としましては、会員施設の皆様に何とか研修の機会を提供できるよう代替案を模索中です。今後も会員施設の皆様が、すぐに現場でいかせるような研修会を企画・実施してまいります。研修部会に対し、ご意見・ご要望等ございましたら遠慮なくご相談ください。よろしくお願いいたします。

（医療法人讃生会／藤井徹也・事務連副会長）

老健ほっかいどう VOL.8 2020年6月

編集・発行　一般社団法人北海道老人保健施設協議会　会長　星野豊
〒007-0803　札幌市東区東苗穂3条1丁目2−18　医療法人社団豊生会　介護老人保健施設ひまわり内
TEL:011-781-8800　FAX:011-781-8822　URL:http://doroken.jp/　E-mail: info-pop@doroken.jp
編集協力・制作／株式会社日本医療企画